

## 《平成28年 研究会活動紹介》

研 究 会 名	代 表 者 氏 名
『唐決』 —日本における天台教学受容過程の研究—	寺本 亮晋
研究会名 略称： 唐決研究会	所 属： 綜佛研究員
活 動 紹 介	
<p><b>【活動内容】</b></p> <p>「唐決」とは、一般的に、寛永三年（一六二六）刊や正保三年（一六四六）刊の『唐決集』に収載される七篇の問答集を指す。それぞれ「問答十箇条 最澄在唐日問 邃座主決議」（伝全所収の『天台宗未決』）、「光定疑問 宗穎決答」、「慧心疑問 知礼決答」（『答日本国師二十七問』）、「徳円疑問 宗穎決答」、「円澄疑問 広修決答」、「疑問箇条同上 維鑄決答」、そして答家不明の「答修禅院問」を指す。最澄をはじめ、平安時代初期の日本天台草創期に活躍した比叡山の学匠（源信の場合、時代も事情も異なるが）は、中国に源流をもつ天台教学を正しく理解・受容するために、中国の天台諸師に疑問を提出し、その答えを求めたのである。この往復書簡ともいえる遣り取りは、その後の日本天台の学匠の經典注釈や論義等に発展する嚆矢となり、また得られた「決答」は、一方で権威ある見解と敬いつつ、他方では日本天台独自の教学開展の基礎となっていた。</p> <p>この「唐決」研究の重要性については、すでに『仏書解説大辞典』における「唐決」の各解説の中で、日中の仏教交流の史料として、また中古天台における論義や口伝が依拠する文書としての文献的価値が指摘されているほか、草木成仏思想や本覚思想に顕著な、仏教の日本化を考える上で示唆に富むとも言われている。初期日本天台の重要資料ではあるが、法相・華嚴等の中国仏教の影響や様々な文化的背景を多分に含んでもいる。つまり、密教将来前夜とも言える時代において、天台教学が日本仏教に与えた影響の大きさを見て取れる総合佛教の名に相応しい資料と言えよう。</p> <p>以上、「唐決」は初期日本天台の当時の教学的疑問と中国での教学的研究成果が交錯する第一級資料であり、日本天台の教学の開展に関しては無論、以後の日本仏教全体に関わる論点を含んでいると言っても過言ではない。しかしながら、個々の「唐決」を取上げた一部の例外を除いて、体系的には十分な研究がなされてこなかったように思われる。</p> <p>そこで、本研究会は、まず「唐決」の注釈・現代語訳の作業を行い、その後は固有の諸論点を検討し、「唐決」全体を見通した研究を行うことで、日本における天台教学受容過程を明らかにすることを目的とする。そこで、「円澄疑問 広修決答」と「円澄疑問 維鑄決答」を第一に取り挙げた。この両書は、同じ疑問に対して答者が異なっており、「決答」それぞれの教学的差異に注目することで、両者の学問的背景等を浮き彫りにすることを目的としたのである。現在は、両書について本研究会独自のテキストを完成させることを目的とし、書き下し・詳細な注釈・現代語訳をさらに進めている。</p> <p>「唐決」とは、一般的に、寛永三年（一六二六）刊や正保三年（一六四六）刊の『唐決集』に収載される七篇の問答集を指す。それぞれ「問答十箇条 最澄在唐日問 邃座主決議」（伝全所収の『天台宗未決』）、「光定疑問 宗穎決答」、「慧心疑問 知礼決答」（『答日本国師二十七問』）、「徳円疑問 宗穎決答」、「円澄疑問 広修決答」、「疑問箇条同上 維鑄決答」、そして答家不明の「答修禅院問」を指す。最澄をはじめ、平安時代初期の日本天台草創期に活躍した比叡山の学匠（源信の場合、時代も事情も異なるが）は、中国に源流をもつ天台教学を正しく理解・受容するために、中国の天台諸師に疑問を提出し、その答えを求めたのである。この往復書簡ともいえる遣り取りは、その後の日本天台の学匠の經典注釈や論義等に発展する嚆矢となり、また得られた「決答」は、一方で権威ある見解と敬いつつ、他方では日本天台独自の教学開展の基礎となっていた。</p> <p>この「唐決」研究の重要性については、すでに『仏書解説大辞典』における「唐決」の各解説の中で、日中の仏教交流の史料として、また中古天台における論義や口伝が依拠する文書としての文献的価値が指摘されているほか、草木成仏思想や本覚思想に顕著な、仏教の日本化を考える上で示唆に富むとも言われている。初期日本天台の重要資料ではあるが、法相・華嚴等の中国仏教の影響や様々な文化的背景を多分に含んでもいる。つまり、密教将来前夜とも言える時代において、天台教学が日本仏教に与えた影響の大きさを見て取れる総合佛教の名に相応しい資料と言えよう。</p> <p>以上、「唐決」は初期日本天台の当時の教学的疑問と中国での教学的研究成果が交錯する第一級資料であり、日本天台の教学の開展に関しては無論、以後の日本仏教全体に関わる論点を含んでいると言っても過言ではない。しかしながら、個々の「唐決」を取上げた一部の例外を除いて、体系的には十分な研究がなされてこなかったように思われる。</p> <p>そこで、本研究会は、まず「唐決」の注釈・現代語訳の作業を行い、その後は固有の諸論点を検討し、「唐決」全体を見通した研究を行うことで、日本における天台教学受容過程を明らかにすることを目的とする。そこで、「円澄疑問 広修決答」と「円澄疑問 維鑄決答」を第一に取り挙げた。この両書は、同じ疑問に対して答者が異なっており、「決答」それぞれの教学的差異に注目することで、両者の学問的背景等を浮き彫りにすることを目的としたのである。現在は、両書について本研究会独自のテキストを完成させることを目的とし、書き下し・詳細な注釈・現代語訳をさらに進めている。</p>	
<p><b>【活動実績】</b> ※出版/論文/受賞・研究助成の経歴など</p> <p>本間孝継「円澄の第十一問について —最澄の教相理解との対比から—」（2011、大正大学総合佛教研究所年報33）</p> <p>本間孝継「『唐決』決答の受容態度からみえること（1） —『愍諭辨惑章』の著者安慧の場合—」（2012、大正大学総合佛教研究所年報34）</p> <p>中間報告（2014、大正大学総合佛教研究所年報36）</p>	

【平成28年度活動計画】

昨年度の研究成果として、「円澄疑問 広修決答」と「円澄疑問 維錫決答」の全三十問の中、四つの問答を書き下し・詳細な注釈・現代語訳を行った。

これで、全三十ある問答のうち、三分の二の読解を終えたことになる。

そこで、昨年度の『大正大学総合佛教研究所年報』第三十八号に中間報告として第十六問から第二十問までを掲載させていただいた。

今年度は第三期二年目にあたるため、更に続けて『綜佛年報』に中間報告を掲載したい。

また、各会員にはそれぞれ「唐決」を主題とした研究を促し、その成果を発表し、論文にまとめるよう依頼してある。

例年のことながら、前期は、新会員のために「唐決」の問答形式や引用の省略等の基礎的理解を中心に進め、後期は輪読形式で担当箇所の読解を進めていくつもりである。